

海外日本人教会：その歴史、現状、ビジョン

——(1) ニューヨークの日本人教会 (上) ——

相澤 一

*本論は、紙数が当初予定していた分量を大幅に越えてしまったため、(上)(下)に分けざるをえなくなった。悪しからずご了承願いたい。

1 問題の所在：対象と方法

1.1 問題の所在

本研究は、海外在留日本人を伝道対象とした教会の活動について、大木英夫と古屋安雄が『日本の神学』(大木・古屋 1989)において提唱した「日本の神学」の線に沿って研究することを試みるものである。

なぜ在外日本人教会か。それは、在外日本人教会研究の必要性は、伝道という立場からすると非常に大きいものであること、そして、それにも関わらず今までいっさい研究がなされてこなかったことによる。

1.1.1 海外在留日本人の増加

グローバリゼーションと呼ばれる世界的動向の中、2016年における日本在留外国人は2,382,822人、日本に入国した外国人は19,688,247人であった(法務省 2017)。

他方、2016年に海外旅行に出かけた日本人の数は、17,116,282人である(法務省 2017)。また、海外在留日本人の人数は1,338,477人であり、そのうち、長期滞在者(3か月以上の海外在留者のうち、海外での生活は一時的なもので、いずれわが国 [=日本] に戻るつもりの方)は870,049人、永住者(当該在留国等より永住権を認められており、生活の本拠をわが国から海外へ移した方)は468,428人である(外務省領事局政策課 2016:13)。

日本の人口は、2018年1月1日時点の人口動態調査によると、125,583,658人(総務省 2018:1)なので、ざっくり言うと、日本人の10人に1人が海外に出かけ、100人に1人が海外で暮らしている、というのが2017年の現状である。

この、海外在留者の数は、平成元年の586,972人から倍増している(外務省領事局政策課 2016:20-21)。一時的にこの増加にブレーキがかかる可能性はあるが、全体的な傾向としては、この、海外への移動は増加していくと考えられる。グローバリゼーションの時代と呼ばれて久しいが、グローバリゼーションの影響は、政治経済や文化といった面はもちろんであるが、まずはシンプルに、人間の移動に表れていると言えるだろう。

1.1.2 日本伝道の定義の変化

ハーベスト・タイム・ミニストリーズを主宰する中川健一は、シンガポールJCF (Japanese Christian Fellowship) 伝道集会において、今は、日本にいながらにして外国人伝道ができる時代であり、グローバル化の中で、国内宣教と海外宣教の区別が徐々に意味をなさなくなっている、と語る。さ

らに、クリスチャンは、①海外邦人への伝道、②在留外国人への伝道、③クリスチャンとなって帰国する人々との共生、④クリスチャンの在留外国人との共生、という4つのチャレンジを受けていると語る(中川 2017)。

グローバル化の只中で、「日本伝道」という時の「日本」の定義が、変わりつつある。今や、日本にいながらにして外国人伝道ができる一方、伝道するために海外に出かけていく必要がある日本人もいる、という時代が来ているのである。

1.1.3 海外日本人伝道の成果

実は、海外に在留している日本人を対象とした伝道は、あまり広く知られてはいないが、すでにそれなりの成果を挙げている。

JCFN (Japanese Christian Fellowship Network) のHPによると、海外で信仰を持ち、あるいは求道を始めて日本に帰国する人々は、年間約1600人に及ぶという (JCFN 2018)。典拠が示されておらず、また、どのように調査したかも不明ではあるが、実数がこれとかけ離れたものでないとしたら、これは驚くべき数字である。

というのは、日本基督教団の統計によると、教団の教会で洗礼を受けた人数は、2013年に1,071人、2014年に1,347人、2015年に1,358人である (日本基督教団 2017)。実数だけ比べても、海外の方が多いためであるが、日本基督教団の教会は基本的に国内で伝道しているのであるから、その伝道対象者数は1億人以上である。他方、海外日本人伝道の場合、在留邦人の人数1,338,477人のうち、帰国してくる長期滞在者は870,049人である (外務省領事局政策課 2016: 20-21)。伝道対象の人数が1/100以下なのに、より多くの伝道の成果を挙げているとしたら、伝道効率は実に教団の100倍以上ということになる。

日本伝道の不振が叫ばれて久しいが、もしかしたら、日本伝道の不振を打破するのは、これら、いわば逆輸入の日本人クリスチャンたちかもしれないのである。

現状がこのようであるから、こうした、海外における日本人を対象とした伝道は大いに研究者の興味をひいてもおかしくはないはずであるが、奇妙なことに、今までまったく研究されていない。研究がされているのは、日本在住の外国人、海外在住日系人、海外日本植民地とのキリスト教の取り組みである。

1.2 従来の研究の視点

1.2.1 外国人移住者とキリスト教

海外からやって来ている外国人に対するキリスト教会の対応については、様々な議論や試みがなされている。

最近、ちょっと盛り上がっているのは、CQ (Cultural Intelligence) の視点からの取り組みであり、筆者の本棚にあるだけでも、多様な聞き手に届く説教を論じるMatthew D. Kim, 2017, *Preaching with Cultural Intelligence: Understanding the People Who Hear Our Sermons*、異なる者を受け入れる共同体としての教会を論じるSoon-Chan Rah, 2010, *Many Colors: Cultural Intelligence for a Changing Church*、クロス・カルチュラル・ミニストリーを論じるOsoba O. Otaigbe, 2016, *Building Cultural Intelligence in Church and Ministry: 10 Ways to Assess and Improve Your Cross-Cultural Competence in Church, Ministry and the Workplace*など、いずれもCQをキー・コンセプトとして用いて、マルチ

カルチュラルな教会のあり方を論じている。

同様の取り組みは日本の教会でもなされており、多文化共生的な立場に立つ、『アジアの隣人と共に生きる日本の教会——21世紀に扉をひらいて』（山田経三 2000）、『移住者と共に生きる教会』（谷大二他 2008）などが出版されている。

1.2.2 日系人とキリスト教

また、同じ海外在住者でも、日系人とキリスト教に関する研究はというと、こちらは汗牛充棟もただならずといった様相を呈している。例えば、北米に限定しても、『北米日本キリスト教運動史』（同志社大学人文科学研究所編 1991）、『アメリカ日本人移民とキリスト教社会——カリフォルニア日本時移民の排斥・同化とE・A・ストージ』（吉田亮 1995）、『北米日本人キリスト教運動史』（同志社大学人文科学研究所編 1991）、『アメリカ日系二世と越境教育——1930年代を主にして』（吉田亮 2012年）、『在米日本人会の黎明期——「福音会沿革資料」を手がかりに』（同志社大学文科学研究所編 1997）などの大部の著作がある。なお、日系人とキリスト教を題材としている以上、そこで取り上げられるのは、アメリカ西海岸地域の諸都市やハワイなど、それなりに大きな日系人コミュニティが存在している地域に限定されている。

1.2.3 植民地伝道

他にも、地理的には海外であるがしかし国内でもあった、かつて日本の植民地だった地域で行われたキリスト教の活動に関する研究も存在する。古典的かつ全般的なものとしては、中濃教篤『天皇制国家と植民地伝道』（1976）、満州伝道については、韓哲曦『日本の満州支配と満州伝道会』（1999）、渡辺祐子・張宏波・荒井英子『日本の植民地支配と「熱河宣教」』（2011）、植民地朝鮮伝道については、飯沼二郎・韓哲曦『日本帝国主義下の朝鮮伝道——乗松雅休・渡瀬常吉・織田檜次・西田昌一』（1985）、信州夏期宣教講座編『日本の「朝鮮」支配とキリスト教会』（2012）などがある。いずれも、精緻な歴史実証的な研究を踏まえての論述であるが、全体的な傾向としては、かつて「熱河宣教」として美談的に語られていたような植民地伝道¹も、実は植民地政策という国策に沿ったものであったという、一種のデバンキングが行われているようである。

1.2.4 新たな、対象に即した研究の必要性

以上のように、在日外国人、日系人、戦前の植民地に対するキリスト教の活動は、あるいは研究され、あるいは取り組みがなされているが、長期滞在のような形で海外に在住している日本人に対するキリスト教の取り組みという問題意識は、驚くほど希薄である。しかし、我々は、海外在留日本人に対して、新たに、対象に即した方法で取り組む必要があると思われる。

「新たに、対象に即した方法で」というのは、例えばタイには40,249人の日本人が暮らしているが（そのうちの3万人以上はバンコクに集中している）、永住者は765人に過ぎず、いわゆる駐在員とその家族が31,357人である（在タイ日本国大使館 2014）。また、シンガポールにも36,963人の在留邦人がいるが、内訳は長期滞在者が34,550人、永住者が2,413人である（在シンガポール大使館 2017）。現在（2018年）、

1 たとえば『近代日本とキリスト教 [大正・昭和編]』には「福井二郎氏の熱河伝道が、中国人への罪に悩む日本人の良心をひきつけ」とある（久山康編 1956：339）。

バンコクにもシンガポールにもそれぞれ2つの日本人教会があり、活発に活動し、日本に回心者を送り出している。まさに「収穫は多いが、働き手が少ない」(ルカ10・2)である。そうした教会の活動は、もちろん在日外国人研究や植民地伝道研究ではないし、バンコクやシンガポールの日本人社会は日系人社会ではないので、日系人研究でもない。それゆえ、従来とは違うという意味で新たな、対象に即した研究がなされる必要があるのである。

ちなみに、地域研究や多文化共生、あるいは異文化コミュニケーションのような、他の研究領域が、そうした長期滞在者たちや彼らのコミュニティを取り上げているかという点、これまたほとんど学術的に取り上げられず、日本人学校や医療機関の利用状況についての調査や、せいぜい意識調査にとどまっている。私見では、その大きな理由の一つは、「何年かしたら帰国してしまう」ということにあるのではないかと思われる。問題解決への取り組みをするにしても、肝心の彼らは、たとえ問題があっても、我慢していればいずれ帰国してしまうのであるから、「時間が解決する」ということになってしまう。また、実態調査をするにしても、人がどんどん入れ替わってしまう以上、実態もそれにつれてどんどん変わってしまう可能性が大きい。見も蓋もない言い方をすれば、長期滞在者たちというのは、あえて研究する必要がない対象と見做されてきたのではないだろうか。

しかし、先に見たように、海外長期滞在者たちは、伝道という観点からすると、非常に重要であり、研究の取り組みが必要である、というのが、本論の立場である。

1.3 研究方法——日本の神学

本論は、その研究の方法として、大木英夫と古屋安雄が『日本の神学』(1989)で提唱している「日本の神学」の問題意識を継承しつつ、それを発展拡大させるという仕方で行うことを試みる。

1.3.1 大木英夫の「日本の神学」

1.3.1.1 日本の神学の方法＝神学的相対主義

大木英夫の神学の主要なテーマはピューリタニズム研究、そして「歴史の神学」であり、この2つが合流する「新しい共同体の倫理学」である。日本のキリスト教は、大木の主要な神学の題材ではないように見える。しかし筆者は、個人的な大木との交流を通して、彼がかつて陸軍幼年学校に在籍していた熱烈的な愛国主義者であったこと、そして敗戦で信じていたことが無残に崩壊する経験をしたことなどの実存的経験が、彼の思想に大きな影響を与えていることを知っている。そして、その影響は、古屋安雄との共著『日本の神学』(1989)を始め、『日本は変わるか?——戦後日本の終末論的考察』(大木・富岡 1996)、『「字魂和才」の説——21世紀の教育理念』(1998)などに、彼独特の日本の神学として表れている。

大木は、日本の神学について、それは「『日本』を『神学する(テオロジーレン)』」、「『日本』を神学の対象とする」企てであり、「『日本』をトータルかつラディカルに対象化する」(大木・古屋 1989: 11)と語る。

そのような対象化は、「神から」という視点を確保することによって可能となる。「神学とはあくまでも『神』をその主題とする学問であるということ、そして神学が神学としての『神』を主題とすることによって、つまり神学が神学となることによるのみ、『神から』の視点において『日本』を神学的に

取り上げることが可能となる」(大木・古屋 1989:232)。

それは、具体的には、「神学的相対主義」(大木・古屋 1989:234)という立場を取ることであり、その立ち位置から、「神のもとに諸民族が相対的に見られるという世界史的展望」(大木・古屋 1989:234)が開けてくる。

そして、その展望は、さらに歴史の神学という展望を開き、その中で日本を神学的に扱うことが可能となる。「こうして神学は『歴史神学』という性格を獲得し……歴史神学における歴史的パースペクティヴをもって『日本』を神学のテーマとすることが可能になる。……第一に神学は『神学』として徹底することによって、神からの視点をもって『日本の神学』へと至るということである。……第二は、『日本の神学』とはすぐれて『歴史神学』的な課題であるということである」(大木・古屋 1989:234)。

1.3.1.2 日本の神学の場=教会

次に、大木は、「『日本の神学』の神学的実存の成立の場所」(大木・古屋 1989:255)を問い、それは教会であるという。「『神学的実存』は……教会において、その実存の〈場所〉をもつ。……『日本の神学』は……神学的実存の場所において、可能となるのである。その〈場所〉は『教会』である」(大木・古屋 1989:269)。

以上の議論を、大木は次のように総括する、「『日本の神学』は『教会』をその〈座〉とした神学、教会的神学である。教会的神学の主題はいうまでもなく、イエス・キリストにおいて自己を啓示された『神』である。しかしその『神』を語る(=theologia)ことにおいてわれわれは絶対者なる神のもとに自らの存在を神学的相対主義によって自覚的に位置づけ、そこから『日本』を問題にするのである」(大木・古屋 1989:270)。

ここには、大木の今までの神学的モチーフであった、「新しい共同体の倫理学」も合流してくる。「日本を神学のテーマとするとき、組織神学の分科としては「弁証学(アポロゲティク)」の独特な企てという性格をもつが、われわれはその神学が立っている場所としての新しい共同体=教会の形成と具体的に関わることによって、本質的に倫理的課題と結びつくことになる。つまりそれは『新しい共同体の倫理学』とならざるを得ない。日本の『古い共同体』から『新しい共同体』へと、『日本の神学』が立っている〈場所〉はまさにこの転換を造りだすアルキメデスの支点となるのである。『新しい共同体の倫理学』は、『歴史の神学』に基づくキリスト教倫理学だが、同じく『歴史の神学』に基づく『日本の神学』という形態の『弁証学』は具体的に『新しい共同体の倫理学』を基礎づける神学的営みとなるのである」(大木・古屋 1989:270)²。

以上が、大木英夫の日本の神学の概略であるが、ここに語られている、神学的相対主義によって開かれるパースペクティヴとしての歴史、そしてそこから世界史を展望する歴史の神学としての日本の神学、さらに、その場は教会であるという線上に、本論も立つ。特に、新しい共同体としての教会の形成という点は非常に重要であると考え。ただし、この、新しい共同体=教会形成の課題を、在外日本人を対象とする教会形成をも含めたものとして拡大することを試みるという点が本論の独自性である。それは、

2 大木の神学的相対主義と新しい共同体の倫理学については、『新しい共同体の倫理学——基礎論』(上)(下)(1994, 1994)を参照。

日本の神学の「日本」の範囲を、グローバリゼーションの動向に沿って拡大する試みである。

1.3.1.3 グローバリゼーションという問題意識

また、大木は、グローバリゼーションを非常に重視する。彼はグローバリゼーションを「世界を、グローバル・スタンダードによって一つにしていく、共通のルールのもとに競争が行われるように、世界を世界化（グローバルイズ）して行く変化過程」（大木 2000：28）と言う。そして、このグローバリゼーションを、モダナイゼーション（近代化）との関連で捉える。「モダナイゼーションとは、今日の世界史的社会的変動の時間の相を言うものであり、グローバリゼーションとは、その世界史的社会的変動の空間の相を言う」（大木 2000：26）。

そして、大木は、このモダナイゼーションを「中世的パリスユ型の教会からヴォランティア・アソシエーションの形をとったCongregational型の教会へという構造変化」（大木 2000：30）において捉える³。このように、近代化を教会史との関連で捉え、近代化の構造の認識とモデルを教会に見出すのが、大木の独特の歴史神学である。

この、大木のグローバリゼーションへの注目も、筆者の問題意識と合致する。大木は、モダナイゼーションの世界的・世界史的広がりとしてグローバリゼーションを見るが、Congregationalとしての海外日本人教会の形成は、大木がグローバリゼーションの中に見取っている動向の延長線上にあるものとみなすことが出来るのである。また、そこではグローバル・スタンダードなキリスト教ということも考察される必要があるであろう。

以上、在外日本人教会という問題意識は、大木の「日本の神学」の問題意識に沿ったものであるというのが筆者の自己理解である。

1.3.2 古屋安雄

1.3.2.1 「不幸なる偶然の一致」——知識階級のキリスト教

古屋安雄は、大木と違い、日本を主要な神学のテーマの一つとしており、『日本伝道論』（1995）を皮切りに、『日本の将来とキリスト教』（2001）、『日本のキリスト教』（2003）、『キリスト教と日本人——「異質なもの」との出会い』（2005）、『なぜ日本にキリスト教は広まらないのか——近代日本とキリスト教』（2009）、『日本のキリスト教は本物か？——日本キリスト教史の諸問題』（2011）と、題名に「日本」と付いている著作を立て続けに出版している。古屋は、自伝的著作『私の歩んだキリスト教』の中で、「考えてみれば、生涯にわたり、日本のキリスト教をめぐって考察してきたようである」（古屋 2013：11）と自身の歩みを振り返って語っているので、この著作の量の多さも納得がいくというものである。

古屋はこれらの著作の中で、日本や日本の教会の問題点をいろいろと指摘しているが、後年、それらは一点に収斂していく。その一点とは、最初にプロテスタントの宣教師が日本伝道を開始した時に、最初に入信したのは武士階級であったということである。

そのことは、山路愛山が『現代日本教会史論』（山路愛山 1971：350-351）で指摘して以来、広く知られているが、古屋は、ピューリタン宣教師と武士階級との出会いは、「不幸なる偶然の一致」（古

3 パリスユからCongregationalへの変化を、近代化の深層構造とみなす大木の見方については、『ピューリタン——近代化の精神構造』（1968、中公新書）を参照。

屋 2009:55)であったと言う。なぜなら、どちらも知識階級の出身であり、この不幸な偶然の一致によって、キリスト教は決定的に知識階級の宗教になってしまったからである(古屋 2009:57)。

古屋は、クリスチャンが戦争協力をしたことも、礼拝が感情を表に出さない、「葬式のような」と言われてしまうようなものであることも、牧師が先生で信徒が学生のような在り方で、学ぶこと一遍同で伝道しないことも、その根底には、この不幸なる偶然の一致があるという(古屋 2009:59-62)。

1.3.2.2 日本のクリスチャンのエリート意識

この、キリスト教が知識階級のものになってしまったという「不幸な偶然の一致」が、古屋によれば諸悪の根源の如きものである。彼は、この、「武士道とキリスト教が結びついたことが、日本のクリスチャン人口の1%を越えられない一因」(古屋 2003:78)であると言い、この結びつきが日本のキリスト教にもたらした様々な弊害を指摘している。

例えば、毎年、受洗者とほぼ同数の人々が信仰から離れて、いわゆる「卒業信者」となってしまうことを古屋は日本のクリスチャンが増えない大きな原因と繰り返し指摘するが、その原因について、「キリスト者となるものの多くが知識階級と学生たちだった」と分析する。「彼らにとって、キリスト教はマルクス主義と同じく、若い時にひかれる外国の思想、青年の理想にすぎない。それゆえに学生時代に入信はするが、卒業して社会人となり、結婚して家庭人となるや、信仰から、教会から遠のいていってしまう」(大木・古屋 1989:217)。

しかし、最悪の弊害は、「キリスト者のエリート意識」(大木・古屋 1989:216)、であり、日本の教会が「エリート意識に固まった知識階級だけの教会」(古屋 2009:29)になってしまっていることである。古屋は、「『量より質』の方が大事だと思っている、エリート意識にこりかたまっている日本のキリスト教徒が、国民人口の一パーセントにとどまっているのはむしろ当然というべきであろう」(大木・古屋 1989:217)と、手厳しい。

1.3.2.3 福音派への注目

この状況を打破するために、日本の教会は、「大衆に大きく開かれた健全な教会」(古屋 2009:29)となる必要があるといい、この点について、福音派に期待を寄せている。「日本の教会がもっと大衆的になれば、キリスト者の人数が増えるのみならず、喜ばしい礼拝になるであろうと思います。その意味で、私はいわゆる福音派に期待しているのです」(古屋 2009:48)。

さらに、筆者が注目したいのは、古屋は在外日本人教会について、そこでは福音派が活躍しているということを知っていることである。「海外に日本語教会がある。これらはみな超教派の教会であって、はじめは日基教団の牧師であるが、そのうちに福音派の牧師となっているのが少なくない。その理由を聞いてみると、教会員の福音派の人々のほうが日基教団の人々よりも礼拝に熱心だからという。バンコクなどの日本語教会では、日本から本社の人々が来ると、日基教団の人々はゴルフに行くが、福音派の人々は礼拝に来るからだという」(古屋 2013:163-164)。

日本伝道論は、ともすると日本人の国民性に伝道の不振の原因を求める傾向があるが、もし、日本伝道を難しくさせるものが、日本人のDNAに刻印されたようなものだとしたら、たとえ在外日本人教会であっても、日本人の教会がどこまでも逃れられない宿願(しゅくあ)の如きものとして現れてくるであろう。しかし、もしそうでないとしたら、それは歴史的・相対的なものであり、それゆえ克服するこ

とが可能である、ということになる。

今のところ、在外日本人教会は主として福音派によって担われているが、果たして、古屋が問題視する、キリスト教の知識階級の宗教化や、教会のエリート意識は、海外の福音派の教会でも、やはり「歴史は繰り返す」となるのか、それとも克服されるのか。在外日本人教会の研究は、古屋の「日本の神学」にとっても、日本の教会の問題は克服可能なのか、というテストケースとしても、また、そこから見えて来る日本伝道と日本の教会の未来予想としても、大きな意味がある。在外日本人教会の研究は、古屋の「日本の神学」で提起された問題とその克服が現実に適応可能であるかどうかを検証する試みでもあるのである。

以上のように、大木が提唱した、新しい共同体としての教会形成という問題意識と、古屋の、知識階級のものに限界づけられてしまった日本の教会の現状打破という問題意識を、筆者は継承し、その線上で、海外日本人教会を研究することを試みるものである。

2 グリニッチ福音キリスト教会——ニューヨークの日本人教会（1）

2.1 ニューヨークの日本人教会の概要

2.1.1 インタビュー調査の概要

筆者は、2016年に極寒のニューヨークを訪れ、日本人教会でインタビュー調査を行った。当時、ニューヨーク州には、日米合同教会、ニューヨーク日本語教会、ユニオン日本語教会の、3つの日本人教会が存在した。これに、所在地はコネチカット州だが、ニューヨークを主要な伝道対象地としているグリニッチ福音福音キリスト教会を加えた4つのうち、日米合同教会を除く3つの教会で、牧師に対してインタビュー調査を行った。日米合同教会は、取材のアポイントメントを取っていたが、牧師がビザの都合で急遽帰国し、キャンセルとなったが、後日、日本においてインタビューを行うことができた。

これら4つのうち、本論は、グリニッチ福音キリスト教会と日米合同教会を取り上げる。というのは、この2つの教会は、同じニューヨークを活動地としながらも、様々な点で正反対であり、そのことが、今後継続していく取材の、海外日本人教会の、そして日本伝道の将来を見通すのに益すると考えられるからである。

2.1.2 ニューヨークの日本人の永住者と長期滞在者の割合

在ニューヨーク日本国総領事館が発表している資料によると、領事館の管轄地域（ニューヨーク州以外に、ニュージャージー州やコネチカット州なども含む）には、少し古い統計であるが、2006年の時点で、98,093人の日本人が暮らしている。そのうち永住者は20,416人、駐在員や留学生が77,677人であり、永住者の数は全体の1/3以下である（在ニューヨーク日本国総領事館 2006）。実際には、在留届を出していない人もいるので、駐在員や留学生の実数はずっと多いであろう。

2.1.3 ニューヨークの特徴——日系人コミュニティの不在

ニューヨークに在住する日本人の数は、ハワイ、カリフォルニアに次いで多いが、それらの州とニューヨークとの大きな違いは、ニューヨークには日系人コミュニティが存在しない、ということである。

日系人コミュニティが多く存在する西海岸は、もともと、日本で十分な生活の糧を得るのが難しくなった、農家の次男坊三男坊といった人々が、農業や鉄道といった仕事に従事するために移住してきて、コ

コミュニティを形成した場所である。

それに対して、東海岸は、もともとが3/4以上は非移民パスポートでやって来た人々であり、そのほとんどが留学生かビジネスマンであった。そのほかの、移民パスポートでやって来た約1/4の人々の多くは、東京や大阪といった大都市およびその周辺出身の、ミドルクラスのバックグラウンドを持った人たちであった(Sawada 1996: 13-14)。一言で言うと、学のある人たちやエリートがニューヨークにやってきた。つまり、ニューヨークには、西海岸で日系人コミュニティを形成した一世たちのような人々はあまり来なかったのである。

2.1.4 棲み分け—マンハッタン周辺とウェストチェスター郡

興味深いことに、ニューヨークの日本人はある程度、マンハッタン周辺とグリニッチ郡とで「棲み分け」が起きているという。

マンハッタンとその周辺、ブルックリンやクイーンズは、電車とバスでどこへでも移動できるので、一人暮らしの女性でも住みやすい。独身者や子供のいない夫婦もマンハッタン周辺に住む。また、大学はマンハッタンにあるので、学生もマンハッタンに住む。

逆に、ウェストチェスター郡には学生や独身者はあまりおらず、駐在員家族が中心である。グリニッチの他にも、ライ、ハリソン、ママロネックといった街に、駐在の日本人家族がたくさん住んでいる。その理由はシンプルで、独身者や学生がわざわざウェストチェスター郡に住む理由がないからである。



図1 グリニッチ郡の地図 (J. One不動産 2018)

ウェストチェスター郡は高級住宅街で住居費が高いが、学校のレベルが高い。公立学校の教育レベルが高く、全日制の日本人学校も小学校から中学校まであり、慶応の高等部もある。それゆえ、子供がいる家族は、子供の教育を考えると、ファーストチョイスはこの地域になる。

さらに、高級住宅街に住めるのは、それだけのお金が出せる企業に勤めている人だけである。かくして、この一帯は、日本人の中では、駐在で来ている家族連れの人たち以外に住む理由がない場所であり、そこに暮らすのは経済的にはかなり裕福な、日本人の中でも成功している人たちということになる。

このグリニッチ郡を主たる伝道エリアとしているのは、ユニオン日本語教会、ニューヨーク日本語教会、グリニッチ福音教会であるが、本論ではグリニッチ福音教会を取り上げる。実は、所在地がコネチカット州ということで、最初はグリニッチ教会は取材リストから漏れていた。しかし、他の教会の牧師とアポイントメントのためのメールをやり取りしていた中で、立石氏は長くグリニッチで牧会活動をしていて、こちらの様子を熟知しているので、ぜひ取材するとよいとアドバイスされ、取材を行った。

インタビューは、グリニッチ福音教会が礼拝を行っているSt. Paul Lutheran Churchの、牧師室として利用している部屋で行われた。

2.2 グリニッチ福音教会の歴史

グリニッチ福音教会は、リーベンゼラ・ミッション・インターナショナル (LMI) がその母体である。

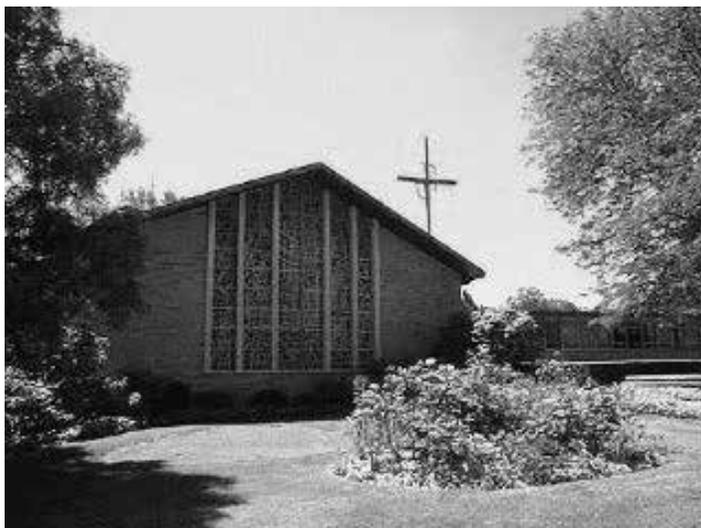


図2 グリニッチ福音教会が礼拝を行っているSt. Paul Lutheran Church (グリニッチ福音教会 2018)

リーベンゼラ・ミッションとは、イギリス人の宣教師ハドソン・テラー (1832~1905) が始めた宣教団体である、チャイナ・インランド・ミッションの働きに賛同した人々によってドイツで始められた団体である。このリーベンゼラ・ミッションから派遣された宣教師が戦後に日本にも来て、チャーチ・プランティングを行った。その後、1992年に、リーベンゼラ、SEND国際宣教団、TEAM (The Evangelical Alliance Mission)、OMF (前身はChina Inland Mission、後にOverseas Missionary Fellowship)

の4つの団体が生んだ諸教会が、教会の連合を作った。それが日本福音キリスト教会連合 (JECA) である。

この合同の前に、リーベンゼラ・ミッションは、「我々は受けるだけでなく与えるようにならないといけない。日本のリーベンゼラの教会から宣教師を送り出そう」ということを決議し、宣教師をリーベンゼラ教会連合の海外宣教部から派遣するということになっていた。しかし合同によってリーベンゼラの本体がなくなってしまったため、海外宣教部が独立団体として自立し、宣教師派遣団体として超教派で活動するということが出来たのが、リーベンゼラ・ミッション・インターナショナルである。

このリーベンゼラ・ミッションから1991年にニューヨークの日本人伝道のために派遣されたのが、近藤泉宣教師である。近藤氏は当初グリニッチではなく、少し北にあるチャパクワで伝道を始めた。チャパクワは、クリントン元大統領も家を持っていたような高級住宅地であったが、当時の日本はバブル真っ只中で景気もよく、日本人駐在員が多く住んでいた。その後、バブルが終わると日本人駐在員はそこに住めなくなってしまったので、教会もチャパクワにいる意味がなくなり、1995年に現在のグリニッチに移動してきて、St. Paul Lutheran Churchという教会の一室を借りて礼拝を始め、現在に至っている。

2.3 立石氏のパーソナルヒストリー

2.3.1 帰国子女としての体験

立石氏は、1961年、東京の杉並出身である。父は銀行員で、1965年、駐在員としてニューヨークに渡ったため、氏も4歳から8歳までをクイーンズで過ごした。その後帰国し、今度は父がロサンゼルスに派遣されたので、さらに11歳から15歳までをそこで過ごした。

立石氏はアメリカで物心つく時期の8年間を過ごしたため、15歳で帰国した時に、日本にアジャストするのに困難があったという。現在のアメリカはPC (Political Correctness) で、ちょっとでも差別的なことを口にする校長室に呼ばれたりするが、氏がアメリカにいた頃の学校は、学生同士が、ニガー、ジャップ、チカノ、と呼び合って、対話で相手をやっつける議論をしていたという。そのようなアメリカでアメリカナイズされた上に、日本語より英語の方が得意でもあったので、日本での振る舞い方が分からず、しかも当時の日本は今のように帰国子女が多くなく、学校も対応ができなかった。そういったことが重なり、友達との関係があまりうまくいかなかった。「結局、自分は賢くなかったんです」と氏は当時を回想するが、いじめられるような辛い体験もしたという。

2.3.2 キリストとの出会い、回心、神学校入学

立石氏の母は、クリスチャンではなかったがミッションスクール出身で、氏と弟2人を、クイーンズ駐在中に地元のアメリカ人教会に通わせていたという。また、氏は帰国後も、その後のロサンゼルスでも地元の教会に通ったが、サンデースクールでの論理的な話に知的に感心することはあっても、信仰までは至らなかったという。

転機となったのは15歳で帰国した時である。友達とうまく付き合えない辛さの中で、教会の若い人たちのグループや宣教師が逃れの場所のようになり、また、聖書のメッセージが心に響いてくるようになり、高校一年の時に受洗した。

しかし、帰国後だんだんと日本での振る舞い方を学習してくるにつれ、受洗の原因となっていた問題も徐々に解決していき、教会には通い続けたがあまり聖書がよく分かっていなかったという。氏が本当に信仰の確信を得たのは大学4年の時で、大学でのトラブルを経験し、その中で自分の罪や愛のなさ、また十字架の意味が分かった、という。その後、兄弟を含む、親しい人が4人亡くなったことをきっかけに、聖書をもっとよく知りたいと思うようになり、卒業後就職していたエンジニアリング会社を5年務めた後に辞め、聖書神学舎に入学、卒業後、1992年に横浜のかもい聖書教会での牧会を始めた。

2.3.3 グリニッチ教会赴任

かもい時代、立石氏は、ある時、先輩の牧師から「私はこれからグアムに行って日本人伝道をするので、後を継いでキャッチャー（日本でのサポーター）をやって欲しい」と言われ、リーベンゼラ・ミッションの理事を引き受けた。そこで近藤氏との出会いがあり、1998年に氏が報告のため半年間帰国している間、グリニッチで留守番として牧会の奉仕をした。そして、2003年に近藤氏が帰国すると、かもい教会から派遣されるという形でグリニッチに着任し、それ以来グリニッチで牧会を行っている。

2.4 グリニッチ教会の特徴

2.4.1 たんぽぽ伝道——基本的な伝道方針

グリニッチでの牧会が、日本の牧会と圧倒的に違うのは、メンバーが入れ替わってしまうことである、と立石氏は語る。グリニッチの辺りは、短い人で2年、だいたい3年くらい、長い人は8年とか10年いる人もいるが、ほとんどは2～5年で入れ替わるという。

そのような場所に置かれているグリニッチ教会の使命は「たんぽぽ伝道」であると立石氏は語る。通常の教会であれば、教会生活を通して、未信者を信仰へ、そして洗礼へ、さらなる霊的成長へと導いていくのが使命ということになるであろうが、グリニッチ教会は「途中預かりの中継点のようなもの」と氏は語る。

それは、アメリカ滞在中に信仰を持った人を、帰国してから日本の教会につなげる働きであるが、立石氏によると、アメリカの日本人教会で洗礼を受けた人は、8割から9割が帰国後も教会につながるという。他方、アメリカで、アメリカの教会で洗礼を受けた人は、3割から4割しか帰国後に教会につながらないという。その違いについて、立石氏は、「日本人教会を経由すると、福音や信仰が分かって帰るので、つながる率が高いと思う」と語る。実際、グリニッチでは、礼拝以上に、小グループ、家庭集会などグループ活動で聖書の学び会などを開いており、帰国後のショックに備えた学びも行っている。

そして、教会のOBたちには、いつもニュースレターを送っている。最近では手紙でなくEメールで送ることの方が多くなったが、グリニッチOBたちの多くが、帰国後も日本の教会につながっていることを思うと、彼らの信仰が継続できる助けになれたことが分かるという。

2.4.2 日本語によるミニストリー

この、日本人教会の帰国後の定着のカギとなっているファクターの一つと考えられ、また、グリニッチの牧会の特徴となっているのが、日本語によるミニストリーである。

立石氏によると、アメリカ人の英語の教会の礼拝に出席していた場合、実はよく分かっていないまま洗礼を受けてしまう人がけっこういるし、たとえそうでなかったとしても、アメリカの教会では日本人は結局は「お客さん」であり、教会生活を通して信仰が成長するのは難しい。さらに、この点をクリアしたとしても、アメリカの教会と日本の教会はかなり文化が違い、それが帰国後の教会への定着の壁にもなる。

立石氏自身は帰国子女なので、英語は堪能であるが、現在、グリニッチでは基本的にバイリンガルではやっておらず、日本語ですべてミニストリーをしている。それは、日本語に乾いている人たちのため、という意味もあるという。例えば、国際結婚しているような人たちは、日本人の集会を離れたらぜんぶ英語で、子供も最近はぜんぶ英語、といった風になると、日本人同士が集まって、日本語で語られる御言葉で励まされ、日本語でお互いに祈り合うことが心の支えになるという。

もちろん逆の事例もあり、グリニッチで洗礼を受けたが、子供が英語を話すので、今はアメリカの教会に行っているという人もいるし、永住者でも同様のことが起こることがあるという。しかし、今のところグリニッチは当面日本語によるミニストリーを続ける予定であるそうである。

2.4.3 財政＝フェイス・ミッション

ほとんどの人が入れ替わってしまうということは、また、経済的に自立した教会としてやっていくこ

とは難しいことを意味する。しかし、敢えてそれを目指していかない路線を立石氏は選ぶ。8割から9割が入れ替わってしまう状況で経済的に自立した教会を目指すのはいささか無理があるので、フェイス・ミッションという形で、日本からサポートされる宣教師という道を氏は選択しているという。

フェイス・ミッションとは、ハドソン・テラーが提唱した、自身の働きについて訴え、神様がサポーターを備えて下さるとする信仰に立つ立場を指す。

そのため、いろいろな教会を回って、自分の働きについて説明をし、支援者が起こされるように活動し、また、2ヶ月に一回はニュースレターを書いて、900人くらいに送付する。今は、かもし教会にサポートチーム（支える会）があり、会合を開いたり、振込用紙を入れたニュースレターを送付してくれたりしているという。

このようなフェイス・ミッションは、常にプレッシャーがかかるが、長所もあるという。もし、教団ベースで、教団の拠出金あるいは宣教師のための予算割り当てで運営すると、宣教師自身は訴えなくてもよくなるし、訴えるとしても、訴えることにあまり力が入らなくなる。サポートする人たちも、つい「どうせ教団費から出ているんだから」と、上の空になってしまう。フェイス・ミッションの場合、そうでなく、支援者と細かく細かくやり取りしながらやっていくので、よく手紙をもらったりするし、こちららもそれに対してせっせと領収書を書き、年に一回は必ず直筆の礼状を書く。また、かもし教会にはサポートチーム（支える会）があり、振込用紙入りのニュースレターの発送などを行う。「同じ神様を見上げて、同じ宣教という目的に向かって協力してやっているという意識がある」と氏は語る。

2.4.4 グリニッチ教会の神学的傾向——福音派

グリニッチ教会の神学的傾向について立石氏に質問したところ、自分は福音派なので、神学的トレンドには関心がない、という即答が帰ってきた。グリニッチは逐語靈感から始まっていき、聖書から汲み取っていくのであり、聖書で十分であるという。

また、牧師の個性というかキャラクターもなるべく出したいくないという。自分は御言葉を通して啓示する神を常に求めていくというところに立とうとしており、身を低くして、御言葉の取り次ぎに仕えるのが牧師の務めであり、それに徹するという。

もちろん、福音派であるということも、神学的傾向ではあるが、福音派の人は、福音派という立場を「神学的傾向」、「教派的傾向」とは考えず、「聖書的」と考えるので、こういう答えになるのだろう。

ともあれ、グリニッチ教会の神学的傾向がこのようなものであるため、その活動も福音派の特色を帯びたものとなる。

2.4.5 聖書の学び—インダクティブ・バイブルスタディ

立石氏は、グリニッチ教会が強調しているのは、インダクティブ・バイブルスタディ（帰納的聖書研究）であるという。これは、氏によると、聖書をそのまま読んでいき、そして質問に答えるという、観察・解釈・適用から成る聖書の学びである。氏によると、この方法は、神学先にありきではなくて、聖書の言葉先にありきであり、アメリカは福音派の教会がたくさんあるので、こういう手引きが山のようにあり、また、アメリカの教会の一つの強さは、こういうバイブル・スタディ・グループがたくさんあることであるという。

立石氏によると、日本のクリスチャンはしばしば大教会病、偉い先生病に陥り、聖書そのものよりも

先生の解釈にぶらさがってしまうが、そうではなく、聖書の箇所から学んでいくバイブル・スタディを氏は非常に重視する。聖書を読む力が身につく、聖書全体を網羅して通読し、毎日デボーションをすることを通して、聖書的な感覚が身についてくるのが大切であるという。氏は、週の間になるべく聖書の学び会のどこかに属することを、日本にいた時から強調してやってきたという。

2.5 グリニッチ教会の活動

2.5.1 ウィークデーのプログラム

立石氏は、グリニッチ教会がコンスタントにやっているのは聖書の学び会であるという。家庭集会、聖書研究会、フォローアップグループ、入門クラスなど、いろいろな形があるが、非常に重要なものである、なるべく1対数人でやるようにしているという。

そのような会が、ウィークデーにあちこちで開かれている。場所は、グリニッチ、スタンフォード、ハートフォード、マウントキスコ、クイーンズ、サラトガ……と、様々な場所で、毎週か隔週、5箇所くらいで家庭集会を開き、聖書の学びと祈りを共にする。集まる人々も、シニア層、永住者、駐在の夫人、国際結婚した婦人など、多種多様である。参加者の移動などで閉じられる集会もあるが、月に何回かは、ハートフォードまで2時間、サラトガまで3時間と、車を運転して長距離移動するという。

他にも、水曜午前中には祈祷会があり、また、未信者を対象に、聖書とアメリカ文化を学ぶことを交えた英会話教室も開いている。

この英会話教室は、ハリソンでも開いている。ハリソンにはたくさん日本人が住んでいるので、聖書の学びをずっとやってきたし、特別集会をやったり、英会話をやったりと、いつも何かしら伝道活動をしているという。

2.5.2 年間イベント

① イースター

グリニッチでは、通常の礼拝以外に、年に何回か行事を行っているが、行事の中で一番大きいのは、イースターである。日本人教会でエッグハントをやるとなると、アメリカにいたのでエッグハントをやりたいが、アメリカ人の教会に行く勇気はないという日本人が大勢集まるという。2015年のイースターには75人くらい集まった。アメリカという場所では、教会が行事をうてば人が足を運んでくれる、種まきの現場としてはこんなすごいところはない、と立石氏はいう。

② ゴスペル・クワイア

2014年に新しく始めたのが、ゴスペル・クワイアである。春と秋の2回行っているが、最初は24人、翌年の春は23人くらい、クリスマスは43人くらい集まった。また、クリスマスのクワイアで夫人が歌うと主人と子供が教会に来るので、2014年のクリスマスには160人、2015年には270人集まったという。

③ 教会合同キャンプ

グリニッチ教会単独でのキャンプは難しいので、日本人教会で協力して、東海岸中高生キャンプを6月末から7月初め頃に開いている。そこには7つくらいの教会が参加していて、30人くらいの子供が参加する。

他にも、ニューヨーク、コネチカット、ニュージャージー、フィラデルフィア、ペンシルベニア、マ

サチューセッツ州ボストンの東海岸合同ファミリーキャンプも、2年に1回行っている。これは2006年から始まったイベントで、準備は8教会くらいでやるが、勧誘はもう少し範囲を広げて声をかける。アメリカは広いので、「この地域の人はこの家に集まる」とか、「アメリカ人の教会に行ってはいるが、毎週日本人で集まる日本人フェローシップがある」とか、個人ががんばっているとか、いろいろなものがあちこちにある。そういうところにも、ぜんぶ声をかけ、15~16の、違ったグループの人たちが、一番多い時で350人くらい集まり、グリニッチ教会関係者からも36人くらいが参加するという。

以上のように、グリニッチ教会は様々なイベントを行っているが、実は、同じ日本人教会でも「行事をやるのはもう止めた」というボヤキがあるそうである。アメリカの日本人教会は、日本の教会のように、スタッフが積み上がっていくわけではないので、常に新しい人達とやっていかなければならないというストレスがあるので、イベントに疲れてしまうということもある。また、あまり行事をやり過ぎない方がいいという人もいるが、教会に足を踏み入れたことがないという人がたくさんいる中で、行事を打って、教会に来るきっかけを作るのもミッションチャーチの一つの使命であると立石氏は考える。

2.6 グリニッチ教会の伝道活動

2.6.1 ニューヨークの日本人の福音受容

立石氏は、ニューヨークは宣教の機会が開かれていると語るが、しかし、日本人はすぐに洗礼を受けるか、となると、海外で洗礼を受ける日本人の数はとても多いとも言われるが、ニューヨーク周辺は必ずしも多いとは思わないという。日系人コミュニティは存在しないが、ウェストチェスター郡は、駐在員を中心に日本人が密集していて、ちょっとした日本人街の如き様相を呈している。そういった地域には日本人コミュニティができているので、日本人同士のしがらみがある。それゆえ、近所の目を気にするし、日本に帰るということをいつも意識しているので、簡単には洗礼を決心しないという。

また、駐在員社会のしがらみ以外に、ニューヨークに派遣されてくる人たち特有の問題もあると立石氏はいう。ニューヨーク駐在員といえばなんだかんだいっても花形なので、優秀な人たちが送られてくる。そういう人たちは、成功している、自信がある、自分たちの知恵と頑張りで生きてきた人たちが多く、それが信仰を妨げるということもある。従って、立石氏の皮膚感覚としては、伝道の難しさ、信仰決心の難しさは、ニューヨークのほうが若干決心者が多いかもしれないが、日本の都市部とあまり変わらず、伝道に応答しづらい人が多いという。

2.6.2 新しい日本人の把握

ウェストチェスターの場合、町に新しい人が来たら、ハリソンやライといった地域は、学校経由ですぐに分かるし、駐在員のメンバー経由で、新しい駐在員がやって来たらすぐに分かるという。

立石氏は、そういう人たちにアプローチする一番いい方法は、どんな時にも口コミであるという。実際、ゴスペルも口コミで広がっている。コミュニティの人々がよい評判にひかれて来る、というのが、伝道の一番の方法であるという。

もちろん、よい評判が広まるのを座して待っているわけではない。チラシはどんどん配るし、一度でも教会の集会に来た人には、ニュースレターを出すようにしている。

また、日本食スーパーの掲示板も用いる。グリニッチ教会の周辺では、グリニッチにも、ハリソンに

も、ホワイトプレーンズにも、日本食スーパーがある。日本のコンビニと同じくらいの大きさしかない、小さな店ではあるが、それぞれのところに掲示板があり、教会の記事物も貼ることを許されているので、何か集会がある時にはそこに案内を貼る。

また、かつては、補習授業校（土曜日の日本人学校）が教会のすぐそばにあり、立石氏の子供たちも通っていたので、そのPTAにずっと関わり、放課後にチラシを学校で配ったこともある。学校側から、チラシの配布は控えて欲しいと言われたので今は配っていないが、幸い、今はクリスマスにゴスペルをやれば166人、270人と集まるようになったので、チラシを学校で配らなくても大丈夫ようになっていくという。

2.7 他の日本人教会との交流

ウェストチェスターには、グリニッチ教会の他にも、ハーツデールにユニオン日本語教会、タカホにニューヨーク日本語教会があるが、ユニオン教会とグリニッチ教会とは、ある程度カラーの違いがあるかもしれないと立石氏はいう。というのは、ユニオンは日本基督教団系であるからである。しかし、ユニオン教会の礼拝は非常に人数が少なくなっているため、グリニッチと月に一回程度、交流礼拝を行い、20人くらいの人が集まっている。また、ユニオン教会が関わっているSMJ（Special Ministries for Japanese）が主催しているディスカバリー・キャンプというサマーキャンプがあり、そこにグリニッチ教会からも子供を送っているし、立石氏がスタッフをやったこともあるという。

タカホのニューヨーク日本語教会は、1998年頃は、40～50人来ていて、若者が多かった時期もあったが、それに対して、グリニッチの教会は、若者のためのミニストリーが出来てなかった。当時、立石氏は留守番としてグリニッチ教会で牧会していたが、教会に来ていた若者たちに、タカホの教会に行くよう勧めた時期もあったという。

2.8 アメリカの教会との交流

近隣のアメリカ人の教会とのつながりはというと、一年中いろいろやっているもので、お互いに乗り入れてやることはそんなに多くはないという。

しかし、リッジウェイのアライアンス教会、ハリソンのプレスビテリアン教会、セントポールルーテル教会、ハートフォードのアメリカ人教会などは、場所を借りて集会を開いているという。

ハートフォードの集会の中心人物がふだん行っている教会が、「あなたたちのためならいつでも喜んで貸します」と言ってくれるので、彼らのために集会をやる場所が必要な時に、教会を使わせてもらっている。他にも、伝道集会をやったり、音楽ゲストを呼んだりする時にも、教会を貸してもらっていることがある。

また、リッジウェイの教会も、グリニッチ教会が何か大きな行事をしたい時に、駐車場があるそちらの会堂を使わせて欲しいと頼むと、喜んで使わせてくれるという。

そのように、アメリカ人教会との交流というと、場所を借りるというのが一番大きい。アメリカでは、多少、教団や教派が違って、福音派だろうとメインラインだろうとあまり関係なく貸してくれるという。

2.9 日本の教会との連携

先に述べたように、グリニッチ教会はたんぼぼ伝道、すなわち帰国後も教会につながり続けることを目指すのであるが、日本における彼らの受け皿としては、1991年に発足したJCFN (Japanese Christian fellowship network) という、アメリカで信仰をもつようになった人たちを日本の教会につなげる働きをしている団体がある。この団体は、全米各地で行われている日本人伝道とネットワーキングしながら活動しており、帰国者カンファレンスをあちこちで開催していて、そこにはおおぜいの人たちが集まっている。

2015年の9月、JCFNが主催するグリコ (GRC=Global Returnees Conference) という集会があり、500人くらいが参加したが、そのうち300人くらいは、海外で信仰を与えられた人たちであったという。

2.10 考察

以上、グリニッチ福音教会の様々な活動について概観してきたが、一つの教会の事例だけで日本人教会について論じるというのはいささか無理があるであろう。しかし、グリニッチの事例だけでも、我々には様々な問題提起が突き付けられてくる。以下それらを、考察という形で述べてみたい。

2.10.1 福音派の台頭とメインラインのガラパゴス化

先に見たように、古屋は「日本の教会がもっと大衆的になれば、キリスト者の人数が増えるのみならず、喜ばしい礼拝になるであろうと思います。その意味で、私はいわゆる福音派に期待しているのです」と語っているが(古屋 2009: 48)、海外在留日本人に対する伝道は、今のところ福音派の独壇場である。グリニッチ教会の母体であるリーベンゼラ・ミッションも、JCFNも、すでに約20か国に述べ70人の宣教師を派遣しているアンテオケ宣教会も(アンテオケ宣教会 2018)、すべて福音派の団体である。

そして、福音派の活躍という点では、ニューヨークも同様である。グリニッチ教会が場所を借りているSt. Paul Lutheran Churchは、教派としてはルーテル教会であるが、その中でも特に信仰の継承に熱心なミズーリ・シノッドである。にもかかわらず、すでにフルタイムのパスターはおらず、ウィークデーのプログラムも行うことが出来ない現状である。

この教会をグリニッチ教会が使わせてもらっているのであるが、他にも、2008年から、ヒスパニック系によるスペイン語礼拝も行われている。南米では、ここ30年くらい、大きなカリスマ・リバイバルが起こっていて、その、癒しも奇跡も異言も悪霊追い出しもなんでもあるような教会がアメリカにやって来ていて、非常に活発に活動をしているという。

立石氏によると、こうした人たちが勢いのある元気な教会をどんどん南米から持ってくるので、アメリカのクリスチャン人口は変わっていないが、メインラインのメンバーが激減し、広義の福音派(同じ福音派の立石氏が見ても「?」と思う部分もあるという)のメンバーが激増と、デモグラフィーは激変しているという。

しかし、この状況は、別の問題を作り出す。というのは、海外の福音派の教会で信仰を与えられた人が帰国した時に、日本基督教団のようなメインラインの教会に出席しても違和感があるという、ミスマッチの問題が起こり得る。福音派の台頭のトレンドが世界的であるかどうかは必ずしも明らかではないが、もし、メインラインの教会が、海外からのリエントリー集団を受け入れることができないとしたら、そ

れは教会がガラケー（ガラパゴス携帯）ならぬガラキョー（ガラパゴス教会）と化すことを意味するであろう。そうなった場合、メインラインの教会はグローバル・スタンダードに準拠していない、ということになりかねない。

また逆に、日本国内のメインラインの教会出身の人が海外で日本人教会の礼拝に出席したら、福音派の教会であったので、違和感を覚え足が遠のくということも起こり得る。こうしたことが起こるなら、古屋の言う「卒業信者」の問題、すなわち、洗礼を受けてクリスチャンになっても、しばらくしたら教会に行かなくなってしまう人が多いという問題が、形を変えて繰り返されることになってしまうであろう。この、福音系の教会との関係というのは、海外日本人教会が日本のメインラインの教会につきつける大きな課題の一つであると思われる。

あるいは、今はまだ夢物語であるが、将来的には、どの教派のどの教会の出身であっても、移動でどの教会に出席するようになって、ミスマッチが起らないような、ユニバーサル・デザイン、あるいは、バリアフリーの教会や礼拝のあり方を超教派的に模索する必要があるが、グローバリゼーションの中では出て来るとも考えられる。教派的伝統は確かに大切ではあるが、それは教会や礼拝のグローバル・スタンダード準拠の枠内でのこと、ということも将来的にはあるかもしれない。

2.10.2 日本におけるキャッチングの課題

この問題と関連するのが、グリニッチの基本方針であるたんぼぼ伝道である。先に、立石氏の、アメリカの日本人教会で洗礼を受けた人は8割から9割が帰国後も教会につながるが、アメリカの教会で洗礼を受けた人は3割から4割しかつながらないという言葉を紹介した。

他方、JCFNのHPによると、「帰国者は海外から日本に戻る時に経験する逆カルチャーショック、日本での生活の忙しさや家族との関係など、帰国を通してうけるチャレンジは多岐に及びます。それがその人の信仰生活にまで影響をおよぼし、残念なことに帰国数年後には、約80%の人々が教会から離れてしまうという現状があります」という。そして、帰国者が直面する問題として、①逆カルチャーショック、②教会がどこにあるのかわからない、③家族との問題、④生活・仕事の忙しさ、⑤クリスチャンの友達がない、⑥証しの仕方がわからない、⑦教会の雰囲気が違う、⑧バイブル・スタディの機会がない、といったことが挙げられている（JCFN 2018）。

8～9割つながるといふのと、80%が離れるといふのとでは、ずいぶん数字に差があるが⁴、いずれにせよ、帰国者が帰国後も信仰生活を続けるのには様々な壁があることは確かであり、せっかく海外で信仰を与えられても、帰国したらそれっきりになってしまう人が多くいるのであるなら、これまた、古

4 後日、立石氏にこのことについて質問したところ、以下のような回答が得られた。「JCFNが関わりを持つ人々のほとんどが独身の若者であり、アメリカ人教会で信仰に導かれているのに対して、ウェストチェスター、グリニッチ、あるいはニュージャージー日本語教会などがあるニュージャージー方面の教会は家族持ちなので、人生のステージが大きく異なるのと、日本語教会に所属することで、アメリカにいながらにして（かなり違いがあるにしても）日本の教会を幾分かでも味わい、知って帰国するので、一方は8～9割繋がるが、他方は80%離れる、と数字に差が出る、と理解しています。アメリカの教会で洗礼を受けた人々が福音を理解していないで洗礼を受けている……ということも一つのファクターです。日本語教会では、そこを日本語できちんと抑えるので、差が大きいです」。

屋の言う「卒業信者」問題が、形を変えて繰り返されることになる。

従って、キャッチャーの日本側は、その壁を取り除く必要があるのであるが、上記の①～⑧をよく見ると、①の逆カルチャーショックと、⑦の雰囲気の違い以外は、日本国内で日本人相手に伝道・牧会をする際にも壁となる事柄である。ということは、帰国者受け入れに際しては、帰国者特有ではない課題もあるのであり、上記のような、福音派との関係という課題以前に、教会は「通常業務」をキチンと遂行する必要があるということになる。

2.10.3 日系人教会化か日本人教会か？

グリニッチ教会は、日本語によるミッションを行い、バイリンガルは行わず、英語対応も部分的である。しかし、次章で詳しく触れるが、日米合同教会は、マンハッタンのニューヨーク唯一の日系人教会ということもあって、礼拝も牧会もバイリンガルで行っている。日米合同教会牧師の高橋和寿氏は、取材の中で、将来的にはどの日本人教会もバイリンガルが当たり前になる、と語る。グリニッチと正反対の行き方である。

バイリンガルか日本語か、という問題は、日本人教会の将来のビジョンと関わる問題である。日系人がメンバーとして増えていくなれば、バイリンガルや英語へのシフトは自然な流れであろう。そして、日系人対象に英語が使用されると、非日系人もそこに加わってくるが、白人よりアジア人同士の方が文化的な親和性が高いので、カップリングされる割合は白人よりも高い。かくして、かつて日系人教会だった教会が、今はアジア・チャーチになっている、あるいは、アジア系が多く集まるインターナショナルチャーチになっている、という事例もある。そうなると、教会から日本というアイデンティティは失われていく。

歴史を辿ると、アメリカの教会は多かれ少なかれ、そういう歴史を辿っているものであり、グリニッチ教会がチャペルを借りているSt. Paul Lutheran Churchもその一例である。それゆえ、歴史を見る限り高橋氏の未来予想にも信憑性はありそうであり、ニューヨークは日系人コミュニティがないので、日系人の世代交代につれて、アメリカ人社会に統合、吸収されていくスピードは速いであろうとも予測される。

しかし、そうなると今度は逆の問題が発生する。西海岸には東海岸よりはるかに多くの日本人が暮らし、日系人も暮らしているし、日系人教会も存在する。しかし、立石氏は、西海岸は思いのほか駐在員に対する伝道が進んでいないと聞いているという。すでに日系人によって教会が成り立っている以上、あまり駐在員のために一生懸命伝道するというふうにならない、ということだろうか。そうなると、日本語によるミニストリーのニーズを満たす教会がなくなってしまうことになる。バイリンガルというニーズは確かにあるが、長期滞在者という形で海外に暮らす日本人が新たにエントリーし続ける限り、日本語によるミニストリーというニーズも残り続けると思われるのである。

2.10.4 教会財政の問題

最後に、立石氏のフェイス・ミッションというあり方を取り上げたい。それは、教会の財政をどのようにして賄うかという問題である。

大雑把に言って、日本の教会は、経済的自立、すなわち、メンバーの献金で牧師のサラリーを含めた財政面のもろもろを賄うことが出来る状態を目指していく。それは、日本の教会が教会税でなく信徒の自由献金で財政を賄う必要があり、また、献金をささげるメンバーの増加は伝道の成果でもある以上、

当然であるとも言える。

しかし、立石氏は、信徒の献金によって自活することを目指さない、経済的基盤をメンバーの月定献金に置かないという道を選択している。実は、取材を始める前は、在留日本人を対象とした日本人教会の最も切実な問題は、固定メンバーが確保できないので収入が不安定であることではないかと想像していたのであるが、実際は、立石氏は、それを問題とは感じておらず、むしろアメリカ滞在中しか教会ができないので信仰の成長を見守ることができないことが一番の問題であると語ったことが、新鮮な驚きであった。

立石氏のフェイス・ミッションが最上の方法であるかどうかはここでは議論しないが、固定したメンバーによる固定した収入を経済的基盤とするという発想は、実は牧師も信徒も基本的に定住していて移動がない、ある意味、中世的コルプス・クリスチアム的なあり方とも言えるだろう。しかし、グローバル化の時代、人はモバイル化している。そうであるなら、メンバーの定住にあわせて牧師も固定する、「住職」的な牧師のあり方を、いわばモバイル対応へとシフトする必要があるのかもしれない。そして、モバイル対応の中には、グローバス・スタンダード準拠ということも含まれるであろう。

グリニッチ教会が実例を示しているように、教会が人口動態にあわせて移動し、少ない地域は出かけに行って集会を持つということもあり得るであろう。また、iPhoneが充電ケーブルとつながるように、スポンサー——それはフェイス・ミッションのような、志のある支援者を募るといふ形かもしれないし、教団や派遣団体の経済的支援かもしれないし、アメリカの大教派のスポンサーを得るといふことかもしれないし、クラウドファンディングかもしれない——とつながってやっていくという形は、グローバル化の時代におけるモバイル時代の人の移動にあわせた教会のあり方として、自活を目指すこと一辺倒でないあり方として、もっと真剣に考えらえるべきなのかもしれない。

最後に、ニューヨークの日本人教会は、御言葉に飢え乾いた日本人が押すな押すなとばかりに押し寄せる、入れ食い状態であるわけではなく、非常な困難の中でやっているということを示し添えておきたい。

筆者がニューヨークの4つの教会の牧師に取材したのは2016年であったが、この論文を執筆している2018年、グリニッチ教会以外の3つの教会はみな、取材した牧師は辞任してしまっている。ユニオン教会は新しい牧師が赴任したが、日米合同教会は新しい牧師を探している最中であり、ニューヨーク日本語教会は、牧師は帰国し、アメリカのアライアンス教団に使わせてもらっていた教会と牧師館も引き払わざるを得なくなり、毎回いろいろな場所を転々としながら集会を行っている。海外在留日本人伝道は、ブルーオーシャンという面もあるが、決して順風満帆ではない。それは、日本伝道が順風満帆なわけではない以上、当然であろう。しかし、海外日本人教会が直面している課題とその解決は、国内の教会にとっても大いに参考になるのであり、それは、海外日本人教会もまた「日本」の教会である以上当然のことであろうということを示し、本論の結語としたい。

【参考文献】

アンテオケ宣教会, 2018, 「アンテオケ宣教会について」, (2018年1月8日取得, <http://jantiochm1977.net/company.html>).

同志社大学人文科学研究所編, 1991, 『北米日本キリスト教運動史』PMC出版.

- 同志社大学人文科学研究所編, 1999, 『在米日本人会の黎明期——「福音会沿革資料」を手がかりに』現代史料出版。
- 古屋安雄, 1995, 『日本伝道論』教文館。
- , 2001, 『日本の将来とキリスト教』聖学院大学出版会。
- , 2003, 『日本のキリスト教』教文館。
- , 2005, 『キリスト教と日本人——「異質なもの」との出会い』教文館。
- , 2009, 『なぜ日本にキリスト教は広まらないのか——近代日本とキリスト教』教文館。
- , 2011, 『日本のキリスト教は本物か?——日本キリスト教史の諸問題』教文館。
- , 2013, 『私の歩んだキリスト教』キリスト新聞社。
- 外務省領事局政策課, 2016, 「海外在留邦人数調査統計——平成29年要約版」, 外務省ホームページ, (2018年1月7日取得, <http://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000260884.pdf>)。
- グリニッチ福音キリスト教会, 2018, 「教会案内」, (2018年1月8日取得, <http://www.jgclmi.com/homwnav.htm>)。
- 久山康編, 1956, 『近代日本とキリスト教 [大正・昭和編]』基督教学徒兄弟団。
- 法務省, 2017, 「平成28年における外国人入国者数及び日本人出国者数等について(速報値)」, (2018年1月7日取得, <http://www.moj.go.jp/content/001213737.pdf>)。
- 飯沼二郎・韓哲曦, 1985, 『日本帝国主義下の朝鮮伝道——乗松雅休・渡瀬常吉・織田楯・西田昌一』日本キリスト教団出版局。
- JCFN, 2018, 「帰国者事情と働きについて」, (2018年1月7日取得, http://jcfn.org/jcfnhome/index.php?option=com_content&view=article&id=745&Itemid=806&lang=ja)。
- J. One不動産, 2018, 「ウエストチェスター・グリニッジ不動産、アパート情報」, J. One不動産ホームページ, (2018年1月8日取得, <http://westchester-greenwich-realestate.com/search-property-america.aspx?mlsCode=Wc>)。
- 韓哲曦, 1999, 『日本の満州支配と満州伝道会』日本基督教団出版局。
- Kim, Matthew D, 2017, *Preaching with Cultural Intelligence: Understanding the People Who Hear Our Sermons*, MI: Baker Academic.
- 中川健一, 2017, 「聖書の神は移住者の神1」, ハーベスト・タイム・ミニストリーズ, (2018年1月7日取得, <https://subsplash.com/messagestation/top-page/mi/+bnc7req>)。
- 中濃教篤, 1976, 『天皇制国家と植民地伝道』国書刊行会。
- 日本基督教団, 2017, 「統計」, 日本基督教団公式サイト, (2018年1月7日取得, <http://uccj.org/organization/organization15>)。
- 大木英夫, 1968, 『ピューリタン——近代化の精神構造』中公新書。
- ・古屋安雄, 1989, 『日本の神学』ヨルダン社。
- , 『新しい共同体の倫理学——基礎論』(上)(下)(1994, 教文館)
- ・富岡幸一郎『日本は変わるか? 戦後日本の終末論的考察』(1996) 教文館。
- , 1998, 『「宇魂和才」の説——21世紀の教育理念』教文館。
- , 2000, 『時の徴 第三ミレニアムとグローバリゼーション』教文館。
- Otaigbe, Osoba O, 2016, *Building Cultural Intelligence in Church and Ministry: 10 Ways to Assess and Improve Your Cross-Cultural Competence in Church, Ministry and the Workplace*, New Jersey: Authorshouse.
- Rah, Soon-Chan, 2010, *Many Colors: Cultural Intelligence for a Changing Church*, Chicago: Moody Publishers.
- Sawada, Mitziko, 1996, *Tokyo Life, New York Dreams: Urban Japanese Visions of America, 1890-1924*, California: University of California Press.
- 信州夏期宣教講座編, 2012, 『日本の「朝鮮」支配とキリスト教会』いのちのことば社。
- 総務省自治行政局住民制度課, 2017, 「住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数のポイント(平成29年1月1日現在)」, 総務省, (2018年1月8日取得, (http://www.soumu.go.jp/main_content/000495346.pdf))。

- 谷大二ほか, 2008, 『移住者と共に生きる教会』女子パウロ会.
- 渡辺祐子・張宏波・荒井英子, 2011, 『日本の植民地支配と「熱河宣教」 いのちのことば社.
- 山田経三, 2000, 『アジアの隣人と共に生きる日本の教会——二一世紀に扉をひらいて』新世社.
- 山路愛山, 1971, 「現代日本教会史論」, 隅谷三喜男編『日本の名著 40 徳富蘇峰 山路愛山』中央公論社: 333-428.
- 吉田亮, 1995, 『アメリカ日本人移民とキリスト教社会——カリフォルニア日本時移民の排斥・同化とE・A・ストー
ジ』日本図書センター.
- 吉田亮編, 2012, 『アメリカ日系二世と越境教育——1930年代を主にして』不二出版.
- 在ニューヨーク日本国総領事館, 2006, 「在留邦人数統計 / 在留邦人数の推移」, (2018年1月8日取得、[http://
www.ny.us.emb-japan.go.jp/jp/html/houjintokei.html](http://www.ny.us.emb-japan.go.jp/jp/html/houjintokei.html)).
- 在シンガポール日本国大使館, 2017, 「シンガポールにおける在留邦人数」, 在シンガポール大使館ウェブサイト, (2017
年10月1日現在、http://www.sg.emb-japan.go.jp/ryoji_TODOKE_hojinH27_j.pdf).
- 在タイ日本国大使館, 2014, 「海外在留邦人数調査統計」, 在タイ日本国大使館ウェブサイト, (2018年1月7日取得、
<http://www.th.emb-japan.go.jp/jp/consular/zairyu06.htm>).

(あいざわ・はじめ)

フェリス女学院大学文学部准教授